# 夏の快進撃 準決勝で幕

## 会津北嶺 創部6年で初4強

創部6年で初の4強入りを果たした会津北嶺の「夏の快進撃」は準決勝で幕を下ろした。三回から2番手で登板した2年生磯川将虎は力強い直球を武器に第2シード学法石川の重量打線に立ち向かったが、2失点。「このチームでもっと野球をしたかった」と悔しさをにじませた。

1点を追う緊迫した展開で、主戦宮城智大からマウンドを引き継いだ。葵との1回戦は満足な投球をできなかったが、登板を重ねるにつれて度胸が備わった。「やるしかない」と直球にスライダー、シンカーを織り交ぜながら、持ち前の打たせて取る投球で大量点を防いだ。3回を投げ、同学年の渡辺新にバトンを託した。

宮城をはじめ、野球部の歴史を築いた3年生は今大会で引退する。秋以降は磯川、渡辺新ら2年生が新チームの軸となる。磯川は「今大会の悔しさを忘れない。先輩の思いを受け継ぎ、必ず甲子園に出場する」と届かなかった決勝と、その先の舞台を見据えた。

【会津北嶺―学法石川】2回裏、学法石川1死一、三塁、打者福尾のとき、一走本郷（左）が二盗。捕手からの送球がそれる間に会津北嶺が勝ち越しを許す。手前右は遊撃手北浦

### 冬の寒さに耐え磨いた打力発揮

会津北嶺の2年北浦

○…「準決勝まで勝ち上がれるとは思わなかった」と会津北嶺の2年北浦空来は大会を前向きに振り返った。厳しい環境で成長するため、沖縄県の石垣島から会津北嶺を選んだ。冬の寒さに驚きながら雪かきやティー打撃で体を鍛えた。準決勝は3安打1打点と打力の高さを示した。「来年までに味方を引っ張れる打者になる」と秋以降に向けて闘志を燃やした。

### 打力で失点を覆す

▼大滝忠明球審 28

どちらが勝ってもおかしくない試合だった。学法石川は失点を覆す打力があり、早い継投で悪い流れを断ったのも大きい。会津北嶺の打線も負けてはいないが、中盤以降は相手の2、3番手投手の攻略に苦しんでいた。

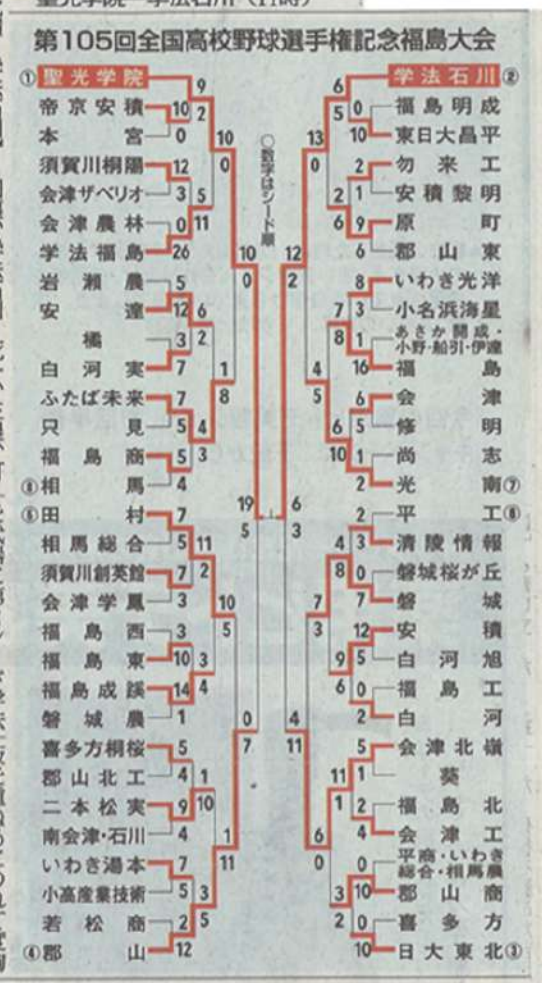
○学法石川・佐々木順一朗監督 早めの継投が功を奏した。三上が悪い流れを断ったことで、打者の気迫が増した。

●会津北嶺・木口樊監督 先制するまでは流れが良かった。学法石川の投手陣の球の切れ味が上手だった。

### きのうの結果

◆あづま
▷準決勝
聖光学院 19－5 郡山（6回コールド）
学法石川 6－3 会津北嶺

### あすの試合

◆あづま
▷決勝
聖光学院―学法石川（11時）

### 第105回全国高校野球選手権記念福島大会